

鈴木 栄太郎

私は、国の内外の都市社会学理論を読んで、鈴木栄太郎の『都市社会学原理』（1957）は現在もなおその体系化と組織化において、他の追随を許さない傑出した理論であると考えている。そして鈴木先生が亡くなられた1966年頃から、機会があれば、鈴木都市社会学理論の形成過程について1つでも2つでも明らかにすることが、直接教えを受けたものとしての責務と思ってきた。

鈴木先生が北海道大学に赴任されたのは1947年であったが、その後の数年間は入院と自宅療養との繰り返しで、都市社会学について御自身の理論を展開し始めたのは、まだ完治をみない51年ごろからであった。

鈴木都市社会学理論の神髄や形成過程を知ることができわめて重要な意味をもつのは、1957年3月北海道大学『文学部紀要6』に掲載された「聚落社会の概念及び都市の概念」という論文（『都市社会学原理』の2章に再録）であった。この論文で提起された「都市とは、国民社会における社会的交流の結節機関をそのうちに蔵している事により村落と異なっているところの聚落社会である」という都市の定義は、今や学会の共有財産となっている。しかしこの立論に達するまでには、いろいろな曲折があり、少なくとも5年から6年の歳月を要したことを、私の手元の5冊の講義ノートは教えている。

私の手元には、私が学生だった1951年の「都市と農村（都市社会学）」と題するノートから、助手時代の53年度から57年度までの講義ノート計5冊が残っている。私は、紀要論文に集約された聚落社会の概念に関する一連の立論が、いかなる時期に形成されたものであるかを知るために、紀要論文の内容と各年次に試みた講義案の内容を比較検討してみた。

当初（1951年講義ノート第2章）先生は、村落と都市を区別する標識は生業の相違（農業的生業と非農業的生業）にあると考えていた。その後

笹森 秀雄（旭川医科大学名誉教授）

（1955年前後）、北海道の農村市街地や苫小牧市等の調査を通じて、村落に「何か」が加わることによって村落はその分だけ都市的性格を帯びようになると考えるようになった。だが、その「何か」が何であるかを決断するまでには相当の日時を要した。しかし、最終的に、その何かは「国民社会における社会的交流の結節機関である」という立論に達し、そして鈴木都市社会学の神髄ともいえるいわゆる「結節機関論」を提起したのである。

私の記憶では、鈴木先生が在札10年間に実際に調査に出かけられたのは、わずか2回だけだったと思う。しかもそれは、健康がやや回復し体力にも自信のもたれた1954（昭和29）年1年間だけだったと思う。第1回は、先生御自身が『原理』の中でも述べているように、54年8月、北海道大学社会学教室において、当時札幌市に隣接していた琴似町の住民について、彼らの聚落社会への帰属関係について調査を試みたときであり、いま1つは、同年8月末に私と2人だけで空知郡浦臼に調査に出かけたときである。

しかし研究室では、先生の指導のもとさまざまな社会調査が企画実施されていった。その多くは、『都市社会学原理』の中で、理論を構築・検証する素材として使われている。先生の強調された「研究の起点は、常に現在の日本における足下の社会的事実の観察にある」という研究指針に基づく社会調査の積み上げが鈴木都市理論を構築したといえるであろう。



鈴木栄太郎

ウィリアム・トマスとフローリアン・ズナニエツキ：真のコラボレーション!?

——『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の著者たち——

桜井 厚 (立教大学社会学部教授)

アメリカ社会学における経験研究の優れた古典といえ、真っ先に『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』*The Polish Peasant in Europe and America*, 1918-20 (以下、『ポーランド農民』)があげられるのはまちがいないだろう。それは理論研究とデータを統合しようとした経験社会学および個人的記録の重要性をうたった質的研究の嚆矢として高い評価を受けている。本書は、R. E. パークやE. W. パージェスに指導されたシカゴ学派の研究のモデルでもあった。ただ、当時の高い評価とは裏腹に、2人の著者は不遇な境遇に甘んじている。W. I. トマスは出版途中でシカゴ大学教授を解雇され、F. ズナニエツキは希望したアメリカでの教職を得ることができずに帰国、ポーランドでポズナン大学の教授になった。

資料収集から『ポーランド農民』執筆まで、2人がどのように共同研究を進めたのか、トマス自身の回想や私信をもとにふり返ってみよう。トマスは1896年にシカゴ大学で博士号取得、すぐにヨーロッパに「放浪」の旅に出て農村をめぐるながら本書の研究テーマの着想を得る。もっとも、本格的に調査に着手したのは1908年、助成金を得てからである。ポーランド人移民の資料収集に着手して『ポーランド農民』出版までに10年かかっているが、トマスはズナニエツキと出会う前の5年間で『ポーランド農民』に使用したヨーロッパでの資料の大半を収集し終えていた。ワルシャワを離れる直前に移民保護協会でズナニエツキと出会い意気投合、彼の渡米の便宜をはかるとともに有能な調査協力者を得たのであった。

おもしろいのは、資料収集にあたってポーランドでの資料を主にトマス、アメリカでの資料(裁判記録や陪審員の評定記録など)は主にズナニエツキが収集したことである。本書は社会学の資料として個人的記録などの生活史資料を重視したこ

とで知られるが、収録されている50家族の手紙は、シカゴのポーランド語新聞の広告で一通、10セントで募集したものだ。手紙が重要な資料になると思いついたのは、自宅近くの街路で少女の父親宛の手紙を拾ったのがきっかけだった、とトマスはのちに語っている。何年間にもわたる一群の手紙から、時間の流れにつれて「態度」の変化がわかるからである。なお、トマスは、インタビューによるライフストーリーの収集には懐疑的だった。調査者が語り手を操作できること、応答に記憶違いが多いことなど、信頼性に欠けると考えたようだ。

ズナニエツキは、当初、資料の記録を取めるのではなく専門論文にすべきだと強く主張したらしい。しかし、結局、トマスの方針に従って『ポーランド農民』の執筆、編集を進めた。主にズナニエツキが原文を書き、それにトマスが改稿、削除などの手を入れた。だから、だれがどこを書いたかを区別することは困難なのだが、ただ「方法論ノート」はほとんどズナニエツキの執筆であることをトマスは認めている。そのためトマスは「ノート」の理論が資料に基づいていないことをしきりに嘆いている。3つの主要な概念、「4つの願望」および「態度」[価値]は、本書の資料をもとに概念化されたものではないからである。トマスは、第2版で「ノート」のかなりの部分を改稿したかったらしい。理論がデータから帰納的に導かれたものでないことは、後年のH. ブルーマーの批評においても指摘されたが、トマス自身も忸怩たる思いを抱えていたのであった。



The Polish Peasant in Europe and America